

Title	井川(恒籐)恭の自我意識の形成
Author	広川, 禎秀
Citation	人文研究. 53 卷 2 号, p.77-94.
Issue Date	2001-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	飯田収治名誉教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

井川（恒藤） 恭の自我意識の形成

広川 禎 秀

はじめに

恒藤恭は、一九二七年九月、『文藝春秋』に執筆した「友人芥川の追憶」²で、第一高等学校（一高）の学生時代に親友となり、それ以来、深い親交を続けた芥川龍之介の個性や思想の形成について興味深い指摘をおこなっている。そのなかで恒藤は、芥川は精神的には著しく早熟であったといい、「後年彼の諸々の作品に盛られた内容の根柢を成す人生観的思想は、高等学校時代の後半期及び大学時代の前半期にすでに確立されてゐたことと想ふ」と述べている³。

一九二一年に発表された恒藤の論文「世界民の愉悦と悲哀」¹を恒藤の世界観形成の一画期とみる私の関心からいえば、そのような恒藤の世界観の原型が形成された時期が一つの検討課題となるが、上記の恒藤の文章は、恒藤の世界観形成の時期について、恒藤自身が一つの示唆を与えている文章だと思われる。

井川（恒藤） 恭の自我意識の形成

芥川の人生観的思想形成の時期は「高等学校時代の後半期及び大学時代の前半期」だとする恒藤の判断は、芥川と恒藤自身との深い思想的交わりが前提になっている。芥川に関する判断内容の妥当性については、私は正確な評価ができない。しかし、恒藤自身が当時、芥川同様の人生観的思想をすでに確立していなければ、そのように断定的にいうことはできないはずである。私は、その時期には、恒藤自身の人生観的思想もすでに確立をみていたと考える。また、芥川と恒藤の交友が互いの人生観的思想の確立に影響を及ぼしあっていた可能性が大きいと推測する。

本稿の課題は、そのような見方が妥当かどうかを検討する前提として、一高入学に先立つ井川の中学時代及び療養生活時代の思想形成について、自我意識形成の問題を中心に分析することである。

松本三之介は、「社会問題の登場とならんで日清戦争後の思想状況を特徴づけたものに、個人的意識の擡頭とそれにとまなう国家と個人

の乖離ともいべき問題があった」と指摘している。そして、日清戦争後から日露戦争後に至る時期の知識人の思想を検討し、時代思潮の動態の一面に「自我の鼓動」、「私的な個の内面的世界の自立化」などの特徴があったとしている。

松本のいう「私的な個の内面的世界の自立化」は、いうまでもなく個人レベルで成立し、かつ一定の範囲で社会的に共有されたはずである。井川恭は、日清戦争から日露戦争のあいだに少年時代を送り、個人的意識が擡頭する時代思潮を鋭敏に受けとめ、さらに「大正デモクラシー」思想の新しい担い手の一人となっていく人物であった。本稿は、松本の時代思潮にかんする指摘と国家対個人という視点から接近する方法を念頭におきつつ、井川の人生観的思想形成の前史を検討する。中学入学から一高入学までの約一〇年間が対象であるが、とくに井川の精神的自立過程における他我との関係に注目しつつ、井川の自我意識の形成について検討することにする。

本稿が対象とする時期の井川は、中学生時代五年間を文学少年として充実した日々を送ったけれども、中学卒業後の約三年間は、慢性的な消化不良症に苦しみ、長期の療養生活を余儀なくされた時期である。しかし、この間に井川は、自分とまわりの世界を深くみつめる精神を自己のうちに育てた。井川は一九一〇年に一高に入学し、充実した学生生活を送るようになるが、一九一一年に徳富蘆花の有名な謀叛論演説に出会い、いっそう広い世界に目を向けるとともに文学研究の志望を転換して法科への道を進むことになる。そうした井川の一高時代の

思想的成長においても、本稿が対象とする時期の自我意識の形成が前提として大きな意味をもったと考えられる。

井川の生い立ちや人間形成については、関口安義と山崎時彦によつてすでに多くの事実が明らかにされている。関口は、恒藤の生い立ちから戦後に至る歩みを丹念にたどり、恒藤の思想の淵源について、「法学を専攻した彼が、冷たい理論家や実務家にはならなかったのは、若き日のキリスト教と文学の受容によるヒューマニズムの精神ともかわらう。彼の『正義感と不屈の節操』も、淵源をここに見ることが出来る」と指摘している。本稿は、関口、山崎の研究に学びながら、自我意識の形成という視角から井川の問題に接近してみたい。

一 井川恭の中学時代について

井川恭は、一八八八（明治二一）年二月三日、旧津和野藩の士族で、鳥根県の郡長などを歴任した井川精一（一八五二―嘉永五・七・一七―一九一〇）明治四三・一・二の次男として松江で生れた。恭の母美代（一八五八―安政五・一一・二二―一九四一）昭和一六・一〇・二五）は、石見国浜田の町人の家に生れた。井川家は、下級士族出身の地方官僚を家長とする松江の名望家であった。恭は八人きょうだいの五番目で、房、繁、清という三人の姉、亮という兄、そして妹の貞、弟の真、完がいた。井川の自我意識形成の問題を考える場合、井川家とくに井川精一の性格に注意しておかなければならない。恒藤

は、父・井川精一について「武士の気質と官吏の習性とを兼ね有してゐた」と述べている。「官吏の習性」という表現は辛らつでさえあるが、さらに家庭での振舞いなどについて次のように書いてゐる。

亡くなった父は社交の方面では洒脱磊落の士人であったが、家庭にあつては専制の君主であつた、子供たちに対しては甚だ厳格な親として振舞つた、併し細かな事に就ては干渉しないで我々の爲すに任せた。

祖父は弓馬鉄砲の技に長けた純然たる武士であつた、父はその下に成人した一方には津和野の藩校から江戸の昌平黌に学んだ、だから父の内的生活を一貫したものは武士気質と儒者の気分であつた。

恒藤は、父の母すなわち祖母について、藩の家中で生れ、「津和野藩の藩士の妻として半生を送つた女性」⁹⁾、「封建的な考えかたから長男の兄をひじょうに大切にとり扱」つた¹⁰⁾、と述べている。井川が父母、姉、兄について記すときけつして敬称を忘れなかつたことなどは祖母や父の影響と思われるが、井川が中学卒業後の進路を文学方面に求めようとしたとき、父がその前に立ちはだかつたことが、井川の自我意識の形成をみるうえで重要である。それについてはあとで検討する。

井川は、一九〇一（明治三四）年三月、島根県師範附属小学校高等科を卒業し、同年四月、島根県第一中学校に入学して、一九〇六（明治三九）年三月に島根県立第一中学校（一九〇一年六月に校名改称）を卒業した。ちなみに、一九〇六年の卒業生八一名の地域別・族籍別

表をみると、士族三七名、平民四四名で平民の方が多かったが、人口中に占める士族の割合を考えれば、当時の第一中学校はこの地方の旧士族層の子弟が社会的地位を維持し、さらに社会的に上昇する重要なルートであつたといえよう。なお、松江に限れば三四名のうち士族が二一名、平民一三名で士族が多数を占めた。しかし、平民の割合が漸増し、一九一二年の卒業生は士族一五名、平民六五名となり、松江でも士族九名、平民二二名となつた。

さて、山崎は井川の中学時代がきわめて順調であつたことを強調し、次のように述べている。

彼のきわめて順調な中学生生活は、故郷松江での水泳、舟漕ぎ、登山、スケッチ旅行、さらに柔道、撃剣、テニス、野球に没頭するものであつた。他方で成績優秀、友人、知人との付き合いもよい好青年の彼にとつては「歎び」の青春時代であつた。当時の短歌に、次のものがある。

今日よ今日よけふぞ楽しき子等よいざ瑞木若葉のもとにうたはむ

関口は、井川が文学少年であつたことを重視している。「井川恭は早熟の文学少年であつた。それは兄亮や姉たちの影響にもよる。井川家は知的雰囲気満ちていた」と述べ、さらに「中学時代の井川恭は、当時の少年の多くが抱いた立身出世とは無縁の世界に生きていた。彼には文学の世界が一番身近であつた」と述べている。しかし、あとでみるように井川が世間の少年が抱くような立身出世の野心を持たなかつ

たとしても、けっしてその志が小さかったわけではない。

本稿ではまず、松本の指摘も考慮し、井川の国家意識を日露戦争に対する態度のなかにさぐることから始める。

(一) 日露戦争への直面

一九〇四年二月八日、日本海軍が旅順港外のロシア艦隊を攻撃して日露戦争が始まり、二月一〇日、日本はロシアに宣戦を布告した。井川が中学三年のときであった。日露戦争の推移に松江市民も一喜一憂した。日本軍の勝利にさいしては、松江市でも戦勝祝賀行事が繰り広げられ、第一中学校の生徒もこれに参加した。

日露戦争を境とする第一中学校卒業生の進路希望の変化をみておく。卒業時の進路希望における陸軍士官学校、海軍兵学校などの軍関係学校の人数は、日露戦争以前は一九〇一（明治三四）年が五四人中一名、一九〇二年は六四人中に軍関係希望者はなかった。ところが、日露開戦もない一九〇四年三月に卒業した生徒は九一名中八名が軍関係を希望した。翌一九〇五年の卒業生は八三名中五名で前年よりは減少したものの、日露戦争後の一九〇六（明治三九）年の卒業生は七七名中一三名が、翌一九〇七年の卒業生は七九名中二名が軍関係を希望し、軍関係学校希望者が卒業生の一割五分を越えた。一九〇六、〇七年の軍人志願の増加は、松江北高等学校百年史編集委員会編前掲書もいうように、日露戦争の影響によるところが大きかったと思われる。

井川は、日露戦争をどのように受けとめたか。さいわい一九〇四年

の井川の日記が残っている。井川の中学三年から四年にかけての日記であるが、「吾家の歴史」という市販の日記帳に、一時期をのぞきほとんど毎日欠かさず記述されている。

一月一七日に、「日露戦争愈々近きにありとの噂にして日魯の交渉破裂の外なし」と記されているが、日露戦争関係の記事は開戦まではほかに一回あるだけである。しかし、開戦とともに戦争関係の記事が激増する。開戦直後一週間の、戦争関係の記事を『日記』から書き抜くと以下のようなる。

二月八日、我水雷駆逐艇旅順口に入り魯艦三隻を沈没す

二月九日、本日正午我日本艦隊に於て魯艦ワリヤーク、コレーツと戦ひ二隻を轟沈せしめたり

我艦隊正午又旅順口外に於て大に魯艦と戦ひて捷つ、魯艦四隻破壊

二月一〇日、本日午後十時宣戦の詔勅を發布せらる

昨日破壊せし魯国軍艦はボルタワ、ディアナ、アスコルト、ノーウィク等なり。司令長官東郷中将に優渥なる聖旨下る

二月一日、昇校、御真影を拝し君が代をうたひこの佳節を祝す魯帝宣戦の勅を発す

戦捷の為人々酔へるがごとし。太鼓の音いつもよりはげし

二月二日、昇校、一時間目は講堂に集まり陛下の万歳を唱ふ。

魯艦四隻北海道渡島沖に到り我商船奈古浦丸を撃沈し
日本海を遊撃

二月二三日、魯艦境沖航行の報あり人心恟々。境湊汽船は安木に
避難し日本海航路一時中止す。郵船は已に御用船とな
り航海せず

二月二四日、父上兄上貞貞らと二の丸に行く。十一時ごろより
本丸天守閣下にて宣戦詔勅奉読並びに海戦祝賀会あり
き

本日未明我駆逐艦旅順口魯艦を襲撃し二隻を破壊す

井川は、開戦の報に緊張し、日本軍の緒戦の戦果にかなり興奮して
いる様子がうかがえる。二月二日、第一中学校は「宣戦の大詔」を
うけ、校長が学生に戦時の心得を訓諭した。「日記」には「陛下の万歳
を唱ふ」と記されている。上記二月二四日の記事にもあるように、地
域社会は戦意高揚に努め、新聞は連日、戦争記事で紙面を埋めた。号
外も数多く発行されたようである。県の要職についていた井川精一の
家には各種の新聞が入っていたようで、井川は、その新聞をよく読ん
でいる。七月三日の『日記』には、「午前六時におきた。大坂朝日、
山陰、松陽、大坂毎日、萬朝報など見て居るうちにひるになった」な
どと記されている。

上記二月一三日の記事にみられるように、日本海の航路が閉鎖され
るなど戦争の影響は松江市民の日常生活にも及び、松江市の人々は日
本海のロシア艦の動向に神経を尖らさざるをえなかったであろう。日

本海海戦のときは、戦場が島根沖にも及び、松江市民も直接その砲声
を耳にしたともいわれる。こうした状況のもとで、井川の日露戦争観
も世間一般の見方から自由ではありえなかった。

井川の『日記』は概して感情を交えないで、戦局の推移を事実とし
て記している場合が多いが、感情が表出している場合もある。日本軍
が二〇三高地を占領し、同高地から旅順港内のロシア艦を砲撃したこ
とを知り、『日記』には「我軍は先に占領せし二百三高地より瞰射を
なし敵艦に我巨弾多く命中し多大の損害をあたへたりと」（二月七
日）、「旅順の敵船隊は我砲撃のため殆んど全滅せりといふ、よい気味
なり」（二月一四日）などという記述がある。「よい気味なり」とい
う表現に、井川のロシア軍に対する敵意があらわれている。

ロシア軍に対する敵意だけでなく、戦争に直面するなかで、井川の
国家に対する傾倒の気持ちが強まった。一九〇四年の『日記』の最後
には、「この年の日記ここにまた終へむとす。顧みれば一年の連想胸
をついて至る。栄光ありしこの年かな。我国開關以来未曾有の大事を
になひて至りしこの年よ、行け今」と記されている。

当時、井川が編んだ「野の花」という表題の手作りの歌集がある。見
かえしには、「雲采ゆる春のあしたのまさなきにわが詩の船のいかり
あげむや」という歌が書かれ、以下に一七六首の歌と一篇の詩が書き
連ねられている。そのなかには日露戦争を歌った歌がいくつかあり、
『日記』の記述以上に井川の日露戦争や国家に対する感情が強く表現
されている。「落葉朽葉 十月二十九日」のなかには次のような歌が

ある。

砲鳴りて野にいかめしきひびきあり正義のこゑひと想ひ見よ
ツアールのおごりの冠なげうてよこの野この水雪つむところ
日の御旗西へ二千里ロシヤの野にかがやく見むよわれらが理想
日の御子の御剣北の野をさして大空たかく雲翔り行く

井川は、日本軍と日本国家を強く支持し、「日の御子」の戦争をた
たえ、日本が「正義」や「理想」をめざしているとしている。しかし、
その「正義」や「理想」という言葉は情緒的で、内容が乏しいといわ
なければならぬ。井川はまた、日露戦争が多数の犠牲者を生み出し
たことに大きな恐れを感じていた。一九〇四年一月二十七日の『日記』
には、「旅順大攻撃の方至る。その陥落には、巨額の費用と多大の犠
牲をはらはざるべからずとなり。前者はいかんとすべし、後者に至っ
ては悚然たらざるをえず」と記している。多大の犠牲者を生む戦争に
おののいたのである。『日記』には日本側の損害、不利な形勢につい
ても簡潔に記されており、井川の冷静な事実認識もうかがえる。

日露戦争によって助長された井川の国家意識は、『野の花』では皇
室に対する敬愛と一体化した形で表現されている場合が少なくない。
次のような歌がある。

彩雲が空を舞ひきて君が代の祝歌うたふ菊のおん宮殿
日の御子のみくらかざると地にさく金弁のはな銀弁の華
光ある史の面をかざらむややまとの子らが血のくれなる

日本および皇室に対する讚美が、いっそう増幅された表現となって

いる。「なにもものと神のみことをかしこみて朝の座にそふ紫の雲」と
か、「海こへて夕べ超け行くくれなるや夢よりゆめに春訪ねよる」と
いう歌もある。皇室の權威の高まりや、日本のアジア制覇の「夢」を表
現している。井川が国家への帰属意識の強まりをみることができるが、
それは当時の井川の世界像の重要な一要素となっていたといえよう。
しかし、『日記』の日露戦争の記述は具体的であるのに対し、『野の花』
の皇室讚美は情緒的で、観念的であることに注意しなければならない。
歌集『野の花』には、戦争や国家の讚美と相反する傾向の歌も含ま
れている。「西へ悲し人を送りて野の末や小川のほとりくれて行く春」
という歌があり、後述するように戦争の暗さを歌った歌もいくつかあ
る。ただし、それらの歌に戦争そのものへの明確な批判が込められて
いるとはいえない。

以上のように、中学時代の井川は日露戦争を強く支持し、国家や皇
室を情緒的に理想化したか、国家意識の形成としては端的で、表層
的であった。それ以上に、この時期に井川が自我の意識を強く自覚し
たことに注目しなければならない。

(二) キリスト教との出会い

『井川恭日記』（一九〇四年）から読み取るべき内容は、日露戦争
のことに尽きない。むしろ、この『日記』から読み取れることは、井
川が日露戦争とは別の世界に大きな関心をもっていたことである。そ
れは、文学の世界に多くの接点を持ち、また固定的でない多様な関心

であった。そのなかにキリスト教への関心もあり、自我の意識化を促す一要因となった。

関口は、「中学校時代の井川恭にとって大事なことの一つに、キリスト教との出会いがある」と指摘し、日本聖公会派の松江での布教活動、日本聖公会松江基督教会の専任司祭O・H・ナイトと井川一家との交流について述べている。

井川の『日記』から、キリスト教が井川の自我形成に、同調と非同調の両面で大きな意味をもったことを読みとることが出来る。井川は、一九〇四年一月二三日新約聖書を購入して、一週間後、ナイトの聖書講義に出席した。クリスチャンの友人・福田秀太郎の紹介であった。一月二十九日の『日記』に、「放課後ナイト君の聖書講義にのぞむ、十余名来会せり」とある。後年、恒藤は「私は英語をまなぶのが目的で、数人の友人たちとそこにかよい、ミスター・ナイトという若いイギリス人の牧師から英文のバイブルをおそわった」と述べている。動機が英語学習にあったにせよ、井川とキリスト教との直接的接触の始まりであった。

六月三〇日の『日記』には、「グレー氏の聖書研究会に出席した、十六人出た、それがすんでから種々宗教上のことについて論じた」、「自然とは神のはたらきなりとグレー氏はいうた」と記されている。W・R・グレーは、一八六七年に生まれ、一八九〇年オックスフォード大学を卒業し、一八九六年来日、私立桃山中学校校長などをへて、一九〇四年出雲伯耆石見担当の宣教師として松江に來た。一九〇四年五月

から翌年八月まで第一中学校の嘱託講師を勤めた。その後、ナイトが一九一〇（明治四三）年から一九一四（大正三）年一〇月まで講師を勤めた。

グレーのキリスト教に関する説明は、井川を納得させなかった。七月二日には「人間が神をつくったのか、神が人間をつくったのか、実に疑問である。もし人間が神をつくったとなれば人間をつくったのはだれであらうか?? 耶蘇教ではSelf-evidentというて居る、即ち神はありてありといふのだ」と書いて居る。翌三日の『日記』には、「われらは宇宙の一分である。われなるものがあればこそ宇宙があるのだ。われの小さいからだも万物に関連して、かの天空に燦々たる星座も余らとつらなつて居るのである。しからばわれら五十年の一生は宇宙の一体であるのである」と記している。神の存在の証明を試みたグレーの見解に同調しなかったものであろうか。

その後しばらく『日記』にキリスト教に関する記述はみられないが、一〇月二六日に次のように記されている。「われは天地の一つの霊なり、我はわれのため生れたり。人のそしりはいかにあれ、われは天地の子なり、天地のうちにわが領は見いでぬべし、もしあたはずば霊のうちにわが家あらむ」と。七月三日と同じ考え方であるが、「天地のうちにわが領」が見出せなければ「(自分の)霊のうちにわが家あらむ」というところに、自己肯定の論理のいっそうの発展をみる事ができる。井川が、キリスト教との格闘によって現実世界を観念的に相対化する論理、それを求める内面的自由という問題に考えが及びつ

つあったとみてよいであろう。

井川はキリスト教の神を受け入れなかった。一二月一日の『日記』に「余の問いに対しグレー氏の答、『神はその栄光をあらはさむがために人をつくり玉へり。』そのことばまことにうつくし。バイブルは詩的なり。されどキリストを信する子らはこのもしからず」と記す。

井川の問いの内容はわからないが、井川はグレーを信服しなかったようである。その前日の『日記』をみると、「吾人は靈魂の不滅を信ぜざるをえず、吾人が生涯はただ現世にて終るがごとくしかく短き榮なき生にはあらず。あゝこの念ありて眞の満足、慰安も生ぜむ」と記しているから、靈魂不滅の問題について質問したのかもしれない。井川の自己中心的な靈魂不滅の考え方に、グレーが賛成しなかったのかも知れない。重要なことは、キリスト教の普遍的な世界観に接することによって、一面でそれに共鳴しつつ、他面ではそれと対峙することによって井川の内面世界が拡大し、自我意識が成長したということである。その後も井川のキリスト教との接触は繰り返えされるが、井川の思想的成長とともに、その接点はいわばらせん状に高くなる。

さて、明治後半期における青少年の自我の問題とは、多くの場合、エリートないしエリート志向する少年の自我の問題であった。さきに、井川が多くの少年が抱いたような立身出世の心情を持たなかったとはいえ、それは志が小さかったことを意味しないと述べた。一月八日の『日記』には、「凡人として凡々の生活をおくり、世間の大海になんらの波瀾をおこさずして世をおはらむぞまことにかひなきこと

なるべき。いでや奮闘してかばねは草かるゝ野にさらすともひとたびは運命の彩おはむに」という文章がある。世俗的な立身出世ではなく、むしろそれを超える大きな意義ある目標をめざしたいという志である。井川は、世俗的エリートを超えるエリート志向する少年であった。

(三) 自我意識と国家意識

この時期の井川の国家意識と自我意識の関係についても少し検討しよう。一〇月末、陸軍は第二回の旅順総攻撃をおこない、その報が一二月はじめに国内に伝わった。井川の『日記』には、一月二日から四日にかけてその記事がみられる。三日は天長節で、学校では拝賀式があり、『日記』には「あゝけふの佳節万里北域の武人らともに万々歳をとなへて祝ふならむとそぞろ感にうたる」と記されている。翌四日には「旅順攻圍軍の攻撃はますます成功せりといふ」とあって、「樂しまむかなこの世、おお天地を見るとき天地わがためにあることき心地するよ。しかりわれよりして見るときわれは天地にただ一つの靈とも見ゆるよ」と記される。自我意識の強まりの背景に、戦勝を誇らしく思う井川のナショナリズムの感情の高まりがある。「功名も運命。零落も運命。かちどきあげて成功をほこらむも、たほれて野の草をこやすともすべて同じ運命なり。あゝ進まむかな」（一月七日）というのと同じ感情である。井川の自我主義は国家意識と共鳴しあう面があった。

しかし、井川の自我意識が国家に完全に包摂されていたとみることは

はできない。六月二〇日の『日記』には次のような記述がある。

嫁が島の岩のうへ、松のもとにすず風にふかれて座したとき実によい気持ちである。日は雲間から金の光を波にやがてちらちらかがやく。何といふのどかなけしきであらうか。余は一生この湖のかたはらにすみたい。

平和な宍道湖のほとりの生活を愛する心情を記している。そのすぐ後に次の文章がある。

去十七日迄得利寺付近にて埋葬せし敵の死体千五百十六名に上りなほ増加すべく鹵獲の銃砲増加せりととの公報である……

ロシア兵の死傷は、「のどかなけしき」に魅せられた井川の気持ちを乱さず、かえって助長した可能性がある。しかし、井川にとっては、なによりも平和な自然やのどかな生活自体が貴重なものであった。

歌集『野の花』を仔細にみると、井川の鋭敏な感性は、戦争の暗い面をすくいあげていくことがわかる。「鞭うちてスラヴ南に野を下る夕べかなしき郷懐ふ歌」、「おもかげにひとりなけよと夜の国に神が下しし寂寥の影」などの歌があり、控えめであるが戦争の悲惨さを詠み込んでいるのである。

井川の感性は、国家的価値に呪縛はされていなかった。一月二四日の『日記』には「ああ楽しむべきかな自然。人事万端味ひ来れば皆これ趣味津々。一種観察的眼光を以て見れば社会、山川、草木みなこれ無声詩、無形の小説ぞ。ああ草木も亦生あらずや」と記し、同二七日には「帝国文学をよみてふかき感想をおこしぬ。余は力のあたふか

ぎり、この偉大なる天然をうたはざる可らず」と記す。世界への旺盛な関心と文学へのあこがれが伝わってくる。

一月三日の『日記』には、「碧旻をのぞむて早朝ひとり立つとき、天地またなんぞ、宇宙はわれのみ、全宇宙即我一体、我即全宇宙」と記す。井川は、一方で神への信仰を拒み、他方で「宇宙」すなわち外的世界の総体を自己と一体化して認識しようとした。

ナイトやグレーは、聖書の講義を通して、井川に神と人間、宇宙と自己、靈魂不滅の問題などを考えさせた。井川はそれらの問題と格闘することによって、文学作品などによって養われた感性や知性により思想性を加えることになり、独自の人生観、世界観を形成しはじめたといえよう。そのようにして形成されはじめた井川の自我意識は、国家主義と共鳴しあう面をもっていったとはいえ、それに従属するものではなく、むしろ自己の価値を肯定し、自己を基点として世界を認識する傾向が強かったのである。

ところで、当時の井川の民衆観はどのようなものであったか。それを知りうる資料は多くはない。九月二〇日の『日記』に「路行いて田園の間にいづ、臭気紛々……農夫の肥えをまけるなり。あゝ百姓はつまらぬものよと感じぬ」という記述がある。井川の民衆観は、まだ深い内容をもつに至らなかった。

二 療養生活時代

(一) 井川の療養生活

一九〇六（明治三九）年三月、井川は第一中学校を卒業した。卒業成績（第五学年の成績）は平均点九〇点で、「八拾壹名中ノ参番」という席次であった。しかし、卒業を前にしたころから、井川は慢性的な消化不良症におちいった。恒藤は、「私は中学校の四、五年生の頃から胃腸を害し、卒業後三、四年間、無為にくらしてゐたことがあった。一度は將に死にさうであった」と書いている。しかし恒藤は、その原因が何であったかはっきりと述べていない。

闘病生活の様子は、一九〇六年から一九〇九年にかけて書かれた井川のいくつかの日記によって知ることができる。一九〇六年以後、かなり精神的なものとともなう慢性的消化不良の症状は一進一退の状態が続いた。一九〇八年には最悪の状態になって、同年秋、約二カ月間神戸衛生院に入院することになった。関口は、そうした井川の療養時代の様子を簡潔に描くなかで、井川『無我無為録』の栽培日誌の一部を紹介して、「透かして見えてくるものは、自らのやり切れない気持である」、「自宅療養中の恭は、図書館通いと草花栽培、そして創作やエッセイや歌稿を書くのが日課であった」と述べている。

『井川恭日記』（一九〇九年）によれば、神戸衛生院退院後も一進一退の状態が続いた。そして七月はじめ、西川医師の診察を受けて転機がおとずれる。七月九日の『日記』に、「大に自然混食療法をすす

められる、これ迄の迷夢一掃の感がした」とある。その後、西川医師のすすめで、牛乳摂取を取り入れるなど食事療法を変更し、徐々に状態が好転し、九月以後本格的回復に向かった。恒藤が後年、「西川さんという医師の指導のもとに食養生をしてから私はめきめき健康を回復し」と述べていることと符合する。

井川は療養生活のあいだも文学への志望を変えなかった。関口は、井川の文学とのかかわりをもっとも強かったのは療養生活の三年間であったと述べている。『日記』と恒藤記念室所蔵の恒藤のスクラップブックから、井川が文芸誌、新聞の文学作品や文学書を貪欲に読み、新聞雑誌に和歌、俳句、詩、小説などの作品をつぎつぎに投稿し、たびたび活字になっていたことがわかる。井川は、一九〇八年三月一〇日に『都新聞』が募集した懸賞小説に応募し、同年七月四日の紙上に井川の小説「海の花」の第一等当選が発表され、当時としては大金三五〇円の賞金を手にすることになった。

山崎も関口も、井川の消化不良症は精神的なものが作用していたと考えている。私は、その原因は進路にかかわる問題がからんでいた可能性が大きいと考える。井川が中学卒業後の進路として文学にかかわる方面を望み、父・井川精一がそれに強く反対したことは、一九一三年に『中学世界』に書かれた井川の小説「さらば中学時代よ!!!」によって強く示唆されている。中学校卒業を控えた作中の主人公が、文学研究をやりたいと切り出したのに対し、その父は「文学を？ 馬鹿な、文学なんか国家の役に立つと思ふか、無用の長物だ、閑人の道楽商売

だ、乃公の子にはそんな無駄学問はさせぬ所存ぢや」と答え、軍人になることを勧めるのである。精一が軍人を勧めたとすれば、主な理由は軍部諸学校が、学資支弁の必要がなかったからであろう。とにかく、精一は恭が文学を志すため上級学校へ進むことを認めなかったと考えられる。しかし、恭は初志を捨てようとしなかった。

前述のように恒藤自身は、慢性的消化不良症の原因については明確な判断を示していない。しかし恒藤が、芥川の健康問題について述べていることが一つの示唆を与える。恒藤は、芥川が創作に専心するなかで身体を虐待し、健康を失っていった理由について、芥川の精神力が旺盛過ぎて、肉体と精神の釣り合いが危うくなったという見方を示し、その兆は高等学校時代にすでにあらわれ、肉体が「彼の精神のはたらきを支へるに足る力にあまりに欠けてゐたとも考へられる」と述べている。もちろん恒藤は、自分自身の病気について旺盛な精神と肉体の釣り合いが崩れたためだとは述べていない。しかし、非合理性を含んだ重たい現実に向面するなかで、井川の精神的な能力が、自覚的無自覚的に自己の肉体に過重な負担を強い、肉体が病的状態に陥った可能性があるのでないか。精神力とそれを支える肉体とのあいだにアンバランスが生じ、一度悪循環におちいれば抜け出すことは容易でなかったと思われる。井川の記事からは、井川の文学志望に反対した父親に対しても、いたずらに感情的に反発した様子はみられない。療養生活中の日記に日々記された厳しい規則的生活、おりおりの自己鍛錬の決意の記述は、自己の主体的努力によって肉体的条件回復を達成し

ようとする強い意志に満ちている。そのなかで、いっそう明確な自我が形成されていった。重要なことは、井川のこのような自我確立の志向が、闘病生活を耐えぬく主体的条件となり、さらにのちに時代の非合理性とたたかう主体性を形づくっていったことであろう。

(二) 自我意識の深化

療養生活時代の井川の記事を読むと、一九〇七年と一九〇九年の『日記』のあいだに微妙な違いがある。日々の生活、出来事を克明に記録している点では同じであるが、後者は記述が淡泊となり、創作活動の減少を反映してそれに関する記述も減り、そこには健康の回復に全力を傾けている意志が感じられるのである。この間に、一九〇八年九月から約二カ月間の神戸衛生院への入院があった。

「海の花」が『都新聞』紙上に連載されてまもない一九〇八年九月、井川は神戸市葺合区（現在・中央区）旗塚通五丁目にあったセブンスデー・アドベンチスト教会の医事伝道機関である神戸衛生院に入院した。当時、神戸高等商業学校に在学していた兄・亮のすすめによるものであった。「海の花」の賞金の一部が入院費に当てられた。神戸衛生院の治療方法は、薬を一切用いず、菜食料理とマッサージで体質を改善するという療法であった。同院はまた、医師や看護婦から炊事人までがセブンスデー・アドベンチスト教会の信者であり、毎日早朝に礼拝がおこなわれるなど、キリスト教的雰囲気には満ちた施設であった。

しかし、入院患者に信仰を強制することはなかった。

井川は九月一三日から一〇月二八日まで入院し、その間の『日記』が残されている。関口は、この『日記』などを資料として、井川が当時学習院高等科に在学中の文学青年で、やがて白樺派同人となる郡虎彦と出会ったことに注目している。この『日記』は、九月一三日から一〇月四日までは日々の出来事は詳しく記されているが、一〇月四日以後一〇月二八日までではなぜか三回の記述があるだけである。入院中の心境の変化、あるいは次に述べる小説の執筆と関係があるのかもしれない。

神戸衛生院入院により、井川はふたたびキリスト教と身近に接することになった。井川には、神戸衛生院の体験をもとに書かれた「大空」という未発表の小説がある。井川の当時のキリスト教観などを知るうえで絶好の資料である。

井川が、衛生院のキリスト教的雰囲気好感を抱いたことは、井川の分身ともいえる「大空」の主人公・上月賢三についての次の記述からもうかがえる。

賢三は自分の信念に於いては耶蘇教に何の価値も置かなかった。けれど耶蘇教のいろいろな習慣形式や耶蘇信者の熱心な信仰の態度や信者の生活等のやうなものに客観的の興味を持って居て、言ふに言はれぬ佳い所があると思ふ事もある。

同じ理由から此讚美歌のこゑも堪らなく佳いと感じた。

注目されるのは、郡虎彦をモデルにした乾と主人公の信仰問題に関

する会話である。井川は、乾の「では貴方は神を認めていらっしゃるのですか？ それとも耶蘇教で謂ふ神を信じないのですか？」という問いに対して、主人公に次のようにいわせている。

無論耶蘇教で云ふ神なんか信じません、そして私は一切の神なんかいふものを否定したいと望みます、けれど私の心の奥の奥の方で何かしら権威ある声が厳かに「神あり、神あり」と呼ぶ様な気がしましてね、其神の前にひれ伏し、その手に抱かれたならば、或は私の心は余程幸福になるかも知れません。けれど「我は強者なり、何物にも跪かじ」と叫ぶ自我の声を聞きますと、最後の最後迄も真理の為に戦はうといふ心が湧いてきます。

井川は、作品のなかで合理的思惟とキリスト教に引かれる心情の葛藤を描いているが、キリスト教への入信は世界を認識する主体としての自我の本質を否定するとも考えたわけである。また、青春の日々を無為に病院で送る境遇こそが神に頼りたい気持を生むとして、それに反発する心理を描こうとした。次のような記述がある。

賢三は斯う考えて来て又反発心をおこした。青春の歡喜も快樂も、一と度過去っては唯うれしかった、楽しかったといふ記憶の快感に過ぎまい。総ての快樂は剎那的生命に終わる。剎那的の物に何で真の自我の満足があらう。あゝ自己といふものの究極の安住は何処にある……。

この作品から、井川が闘病生活のなかで、神にすがりたい心情を実感するとともに、他方で強靱な自我の確立を志向していたこと、また

自我の確立を追求する一方で、自我に固執する自己にも一定の距離を置いてみていたことがうかがえる。そのようにみれば、断定はできないが、「大空」は入院中に構想が立てられ、入院中に書きはじめられた可能性もなくはない。

「大空」という作品には、主人公が東京へ行く意志を固めたくだりがあり、井川が父の反対などがあっても、文学研究のため上京する決心を固めつつあったことが示唆されている。しかし、前述のように衛生院退院後、一九〇九年に入って井川の健康状態はふたたび悪化し、ようやく同年九月以後回復に向かった。『井川恭日記』（一九〇九年）によれば、健康回復を待っていたかのように、一〇月以降、熱心に代数や幾何の勉強を始めた。受験準備の勉強といつてよい。

この段階の恭と精一の関係はどうみたらよいか。『井川恭日記』（一九〇九年）の七月一九日の記事に、「午後、皆の昼食の傍らにいつて話す。談はこのごろの父上のオホキナ、顔についてで姉上たちは父上のニガイカホに大不平だ」とある（傍点は井川）。姉たちの父を非難する理由は不明だが、恭も非難に同調していたとみてよいだろう。前述の恒藤「父のおもい出」における精一への評価、とくに家庭での精一についての評価は厳しいものがある。自分の文学志望に反対したことも含め、家庭における「専制の君主」という見方は闘病生活を通じて固まったものではないか。もし父が井川の文学研究のための進学に同意していたら、後年「専制の君主」とはいわなかったと思われる。おそらくこの段階で井川は、父については思想を異にする他我とみな

井川（恒藤）恭の自我意識の形成

す判断を固め、その意思にさからって自分の意志を実行に移す準備に着手していたのであろう。井川の中学校長訪問も、その傍証となる。

井川は、十一月四日、松江中学校の西村房太郎校長宅を訪問したが、校長に差支えがあるとこの日はすぐに辞去した。井川は再度、二月二日に訪問し、「前途の方針について意見を聞」いた。校長の話の内容は次のように『日記』に記されている。

広島高師の期限が二十日計りすぎたといはれた。結局、高師の方も一応しらべておかうが、高等学校の英文科が早稲田かをやったらどうかとの事であった。

西村校長は、井川の本心を察し、高等師範よりも高等学校の英文科が早稲田大学をすすめたものといえよう。西村は、一九〇〇年に東京帝国大学文科大学史学科を卒業し、同年第一中学校に奉職した人物であるから、井川の文学方面への進学に理解を示したのは不思議ではない。この記述からみれば、井川のほうから高等師範のことも相談したようであるが、校長は高等師範には消極的だったようである。前述の「さらば中学時代よ!!!」によれば、主人公は文学志望のことで校長に相談し、父親を説得してもらったことになっている。小説のなかでの進路の相談は、事実にもとづいて書かれているわけである。しかし、このころ井川精一は病気になる、回復することなく翌年一月二日に死去する。校長が、そのようなときに恭の進路のことで精一を説得した可能性は小さい。

父の葬儀をすませ、一九一〇年四月、井川は上京した。都新聞社に

入社し、記者見習となつて、生活の資をえながら受験に備へることになる。

(三) 国家意識の態様と民衆観の変化

日露戦争中に端緒的に形成された井川の家意識のその後の態様をみておきたい。「井川恭日記」(一九〇七年)には、二つの注目すべき記事がある。一つは、井川の皇室観が表出している記事である。具体的には、五月の皇太子の松江行啓関係の記事、九月の閑院の宮妃の松江行啓に関する記事などである。皇太子行啓に関する記事をみてみよう。皇太子は、五月一〇日、東郷平八郎らを従え山陰道行啓のため東京を出発したが、各地で大掛かりな歓迎体制がつけられた。各新聞は連日、行啓関係記事で紙面を埋めた。皇太子一行は、松江に二二日から二六日まで滞在し、各所を訪問、盛んな歓迎を受けた。井川は五月二三日、皇太子が県庁に入るところを直接みる事ができた。井川は、行列を待つ人々の様子や皇太子をみた感激を「実に夏のやうであった」と記している。その後も、井川は市内で皇太子の行列に接する機会があり、「日記」はその様子を書きとめている。「日記」から、このときの「行啓」の盛り上がりぶりがわかるが、同時に井川の皇室への尊敬心も大いにかきたてられたことがわかる。

しかしそれだけではない。井川は皇太子行啓報道を読み、「帝王、君主、榮華、盛飾、そして余はと見ると薄命の寒生」と、皇太子の榮華とわが身の不運とを比べ、帝王らを羨むべきかと自問する(五月一

一日)。「いや何事も夢、世紀一たび転じてはすべての榮華の影もあるまい。……主観を没して万事に楽しむものが至幸だらう」とも書いている。逆境のなかで「万事に楽しむ」境地に達しようとする自意識が注目されるが、井川が国家主義を相対化する可能性もそこに胚胎していたと思われる。

注目すべきもう一つの記事は、井川の朝鮮観にかかわる記事、具体的にはハーグ密使事件に関する記事である。ハーグ密使事件とは、第二次日韓協約で外交権を失った韓国の皇帝高宗が、日本の対韓政策に抵抗して一九〇七年六月、ハーグで開催中の第二回万国平和会議に密使を派遣し、会議参加を拒絶された事件である。この事件で日本は、七月に皇帝を讓位させ、第三次日韓協約を結んで韓国支配を強化した。七月五日の「日記」には、はじめて万国平和会議に関する記事が出てくる。「大阪朝日新聞」は、七月九日、韓国皇帝がハーグに「委員」を派遣したことを認めざるをえなくなったことを報じ、一三日には第一面トップに「韓皇御謀叛」という社説を掲げ、皇帝の責任を追及した。井川は、七月一三日の「朝日新聞」を読んでおり、同日の「日記」は「韓帝密旨事件は中々重大になった。好い気味だ」と、日本の追及によって韓国皇帝が窮地に立ったことを歓迎している。それ以後、井川はこの問題について新聞報道により日本の対応などをたびたび書き記し、時々感想も加えている。七月一九日には、「号外が来た。今暁二時韓帝は讓位の勅を発した相だ。うまいうまい、今度は大出来だった」とあり、七月二六日には日韓新協約について「要は統監に内政上

絶対の権利をあたへることだ。ちと物足らぬやうに思はれる」と書いている。「日記」には、韓国軍隊の解散命令に対して起こった「暴動」(義兵闘争)についての記述が続くが、それには感想は付されていない。

ハーグ密使事件と日本の対応についての記述は、井川が日本の韓国支配を当然とみなし、日本の強硬な対応を支持していたことを示す。若き日の井川のアジア観、とくに朝鮮観は、その世界認識におけるアキレス腱ともなりうるものであった。

療養時代の井川の民衆観もみておかなければならない。中学時代からみれば、民衆観には一定の変化がみられた。一九〇七年九月二四日の『松陽新報』に「時代の趨勢」の題で載り、さらに同年一〇月号の『ハガキ文学』に「時代の反影」と改題されて載った井川の商品がある。山崎が「珍しく社会へ向った詩」として早くから注目した作品である。¹¹「時代の反影」の最後の部分は、「聞けや自然のふところの、清きをはなれ罪悪の、巷に集ふ労働者、女工の群れのぼんに餓ゑ、富者の生命を呪ふては、社会の破滅をよぶこゑを、宰相頭をなやまして、学者額を鳩むとも、此の謎いつか解く日あるべき」とむすばれている。観念的表現に流れているが、田園の荒廃や資本主義社会を呪詛する都会の労働者に目を向けている。『井川恭日記』(一九〇七年)の九月一日の記事に、「新体詩を考へる、都会の膨張、田園の荒廃をうたうのだ」とあるが、その意図にもとづいて書かれた作品である。

注目すべきことは、「大空」に神戸の貧民窟・新川の様子が具体的

に描かれていることである。その記述はきわめてリアルであり、井川が実際に新川へ行き、自分の目でみた街や住民の様子を書いたことは疑いない。実際に足を運んで事実を確かめている点に、井川の社会問題への姿勢の変化をみることができる。さらに、作中の主人公に「金満家^{カネマン}って奴あほんに狡い横着なものですね。一人で広い地面を思ふ儘にして大きな立派な家を建てて！ 貧民の呪詛^{のちひ}的、怨恨^{うらみ}的。夢見の悪い事でせうね。一体耶蘇教の各派なんかもつと貧民救済に力を入れなくちゃ不可^{いかん}ですな」といわせている。キリスト教会の対応を批判する形で、行政や社会の貧民問題への対応を強く批判しているともいえるが、ここでキリスト教に社会改良思想としての役割を期待している点に注目すべきであろう。井川の民衆観、社会観の一定の変化を確認することができる。

おわりに

日清戦争・日露戦争をへて「大正デモクラシー」がおこる時期には、個人の自我意識が知識人のレベルで広がったとされるが、松江の名望家に生れ、早熟な文学少年として育った井川恭はその一例である。それはエリート志向する知識青年の自我意識の問題であった。井川の自我の自覚とは、結局、ありのままの自己とその発達を肯定することに本質があった。井川は、「国家」や「神」に身をゆだねることをせず、その意味で「世界」を認識する自己の理性的立脚点をけっして譲らなかつた。

恒藤がいう人生觀的思想の形成は、そのような自己肯定の延長線上にあったと考えられる。恒藤は、「世界民」論文で世界民の立場と自我の關係について次のようにいう。「自覚とは人間が自己自らのうちに自己の本質を見出す心のはたらきを指す。世界民の考へ方から言へば、人間が自己自らの内面に深く沈潜して、自己をして人間たらしめる至醇の本質をすっかり把握する刹那に、世界民としての彼れの生涯は始まるのだ。だから人間が真実の自我にめざめるとき、彼れは自らを世界民としての彼れの意識のうちの民籍に登録するのであると、世界民は自ら省みて確言するのである」。本稿で検討した井川(恒藤)の自我の成長と自覚は、恒藤の人生觀的思想形成の前史であり、その後人生觀的思想は一人入学以後に本格的に形成され、恒藤の世界觀形成の前提となっていくと考えられる。

注

- 1 恒藤恭の旧姓は井川。一九一六年一月、恒藤規隆の長女雅と結婚し、恒藤姓となる。本稿では、井川姓の時代は原則として井川と記すことにするが、適宜恒藤姓も使うことにする。
- 2 恒藤恭「友人芥川の追憶」(『文藝春秋』一九二七年九月、恒藤恭「旧友芥川龍之介」朝日新聞社、一九四九年、所収)
- 3 同前(『旧友芥川龍之介』二〇頁)
- 4 恒藤恭「世界民の愉快と悲哀」(『改造』一九二二年六月号、恒藤恭『国際法及び国際問題』弘文堂書房、一九二三年、所収)

- 5 拙稿「恒藤恭の『世界民』の思想」(『市大日本史』第三号、二〇〇〇年五月)
- 6 松本三之介「明治思想史」新曜社、一九九六年、一九二頁
- 7 関口安義「評伝 恒藤恭(一〇)」(『都留文科大学研究紀要』五四集、二〇〇二年三月、二四三頁)。井川がキリスト教を「受容」したといのは、あとでみるように正確でない。
- 8 恒藤恭「父のおもい出」(『松陽新報』一九一七年八月、恒藤恭著/山崎時彦編「若き日の恒藤恭」世界思想社、一九七二年、所収、二五—二六頁)
- 9 恒藤恭「一番会いたい人—亡き母—」(『大法輪』一九六七年四月、山崎時彦編前掲書所収、二八頁)
- 10 恒藤恭「読書のおもい出」(『現代随想全集』二七、一九五五年三月、山崎時彦編前掲書、所収、一九九頁)
- 11 松江北高等学校百年史編集委員会編「松江北高等学校百年史」鳥根県立松江北高等学校、一九七六年、四六〇—四六一頁。
- 12 山崎時彦「恒藤恭の法哲学志向—その端緒期」(『法学雑誌』四六卷一號、一九九九年一〇月、三頁)。山崎のこのような見方は一貫している。なお、山崎が示している歌は、一九〇五年のときのものである。
- 13 関口「評伝 恒藤恭(一)」(『都留文科大学研究紀要』四五集、一九九六年一〇月、二三八—二四〇頁)
- 14 松江北高等学校百年史編集委員会編前掲書、四〇七—四三三頁
- 15 松江北高等学校百年史編集委員会編前掲書、三八六—三八九頁、四七

- 二一四七三頁。当時上級学校は九月入学で、進路調査は三月卒業時のもの。その後進路が変わった場合もある。
- 16 大阪市立大学恒藤記念室蔵。各頁ごとに、「往来」、「為したる事」、「得たる思想」、「社会の出来事」、「雑事」という欄がもうけられ、それぞれの欄にその日の出来事を書くようになっている。日露戦争に関することは、多くが「社会の出来事」欄に書かれている。「井川恭日記」(一九〇四年)と表記するが、年次などの誤認のおそれがない場合は「日記」と略記する。
- 17 松江北高等学校百年史編集委員会編前掲書、四〇八頁
- 18 同前、四一八頁
- 19 輝陽(井川恭のペンネーム)「野の花」卷之二、二五頁、一九〇四年一月、大阪市立大学恒藤記念室蔵。
- 20 関口安義「評伝 恒藤恭(一)」(前掲書、二四〇―二四三頁)
- 21 恒藤恭「一番会いたい人―亡き母―」(山崎編前掲書、二九頁)
- 22 松江北高等学校百年史編集委員会編前掲書、四二二、四二〇、五四二頁。なお、グレーは一九〇五年三月の卒業式で英語演説をおこない、「日本が世界の強国たる露国と戦って連戦連勝の勢なるは甚だ快心の事」などと述べたとされているから、反戦思想とは無縁だったようである。
- 23 『井川恭日記』(一九〇四年)は、七月末から九月ははじめまで約一ヶ月の空白がある。
- 24 島根県立松江中学校(島根県立第一中学校が一九〇七年四月に改称)の一九一〇年四月八日発行の「井川恭試験成績表」(恒藤記念室蔵)。
- 25 恒藤「友人芥川の追憶」(前掲書、二二頁)
- 26 一九〇六年半ばから一九二〇年始めまでを療養時代とすれば、この間の井川の日記類には、一九〇六(明治三九)年七月から一二月までの手紙・作品等の写しを記した『井川恭日記』(一九〇六年の手紙・作品等)、一九〇七(明治四〇)年の市販の「当用日記」に記された『日記』(一九〇七年)、一九〇七年一〇月から翌一九〇八(明治四一)年七月までの自家菜園・花壇の園芸日誌ともいうべき『無我無為録』、一九〇八年の『日記』(神戸衛生院入院中)、一九〇九(明治四二)年の市販の「当用日記」に記された『日記』(一九〇九年)がある。
- 27 関口安義「評伝 恒藤恭(一)」(前掲書、二二二―二二七頁)
- 28 恒藤恭「なつかしい明治の頃」(『京都新聞』一九六七年一月二四日・二月一六日、夕刊、山崎編『若き日の恒藤恭』所収、二二頁)
- 29 関口「評伝 恒藤恭(一)」(前掲書、二二七頁)
- 30 鈴かけ次郎「さらば中学時代よ!!!」(『中学世界』一六巻六号、七号、一九二三年五、六月)。鈴かけ次郎は井川のペンネーム。
- 31 恒藤「友人芥川の追憶」(前掲書、二二頁)
- 32 『井川恭日記』(一九〇七年)によれば、兄・亮は、すでに一九〇七年五月、恭への手紙で神戸衛生院のことを知らせ、その治療を受けるようにすすめている。
- 33 『井川恭日記』(神戸衛生院入院中)は、九月二三日から一〇月二八日までの神戸衛生院入院中の記録で、普通のノートブックに書かれ、九五頁にも及ぶが、表題は付けられていない。

34 関口安義「評伝 恒藤恭（二）」（『都留文科大学研究紀要』四六集、一九九七年三月、二六七頁）

35 中学校卒業後も、井川とキリスト教との接触は続いていた。一九〇六年二月二十九日の友人箕浦忠愛宛の手紙（写し）には、「先日のクリスマスには春陽館の青年会の祝賀会にクリスマスチャンの友人に誘はれて夜いって見ました。私は英語研究の為バイブルを習った事はありませんが耶蘇教は嫌ひです。が、しかし濁世に走った世になほやはり聖い人々があると思うと何だかうれしい気がしました」と書かれている。（『井川恭日記』一九〇六年）。キリスト教への親近感と反発の並存を示す資料である。

36 「大空」は、井川天籟の筆名で、松江市末本奥村製の原稿用紙（二四×二〇行）約二九〇枚に書かれた手書きの原稿で、新聞小説の形となっている（恒藤記念室蔵）。一九〇八年一月ころから一九〇九年中の間に執筆されたと推定される。表紙に「旧稿、御笑覧に供す。御批評を得バ幸甚」というのちに書かれた朱書きがある。作品は、執筆後発表の機会を得ることができず、しばらくたって井川はどこかに発表の機会を求めたものであろう。しかし結局、発表の機会は得られなかったと考えられる。

37 杉山正樹「郡虎彦 その夢と生涯」岩波書店、一九八七年

38 関口「評伝 恒藤恭（二）」（前掲書、二五九―二六三頁）、鈴かけ次郎「二週間の勉強で一高の入学試験を通過した僕の経験」（『中学世界』臨時増刊、一三卷二二号、一九一〇年九月）

39 『大阪朝日新聞』一九〇七年五月三十一日、原武史『大正天皇』（朝日新聞社、二〇〇〇年、一〇八一―一九頁）

40 井川天籟「時代の趨勢」及び「時代の反影」は、表紙に「井川天籟／弧喰集／明治三十拾九歳次丙午」の表題のある恒藤記念室蔵のスクラップ帳に貼りつけられている。「井川恭日記」（一九〇七年）によって、九月二四日の『松陽新報』に載り、さらに日本業書会の「ハガキ文学」に当選したことがわかる。前者と後者は同内容であるが、一部表現が異なる。「ハガキ文学」は当選作品を、「天」「地」「人」賞の三ランクに分けたが、井川作品は「天」である。「弧喰集」は、一九〇五年から一九〇九年にかけて、新聞雑誌に掲載された井川の詩歌を切り抜いて貼りつけたスクラップ帳である。

41 山崎時彦「解説」（山崎編前掲書、三四―三頁）。

42 恒藤「世界民の愉悦と悲哀」（前掲『改造』六三頁）